「まちの移ろいとその行方」

●講演者：向口 武志 氏
●開催日：2022年 12月 9日

「まちをみつめる建築家」をテーマに行ってきた全4回連続企画の第3回目となりました。今回は、町並み研究のエキスパートである、向口氏にご登壇いただきました。私は、リモートでの参加となりましたが、「まちの移ろいとその行方」を主題に、世界と日本の歴史的な町の背景と特性、そのポテンシャルについて、お話しいただきました。

○町の移ろいと都市計画

未来の都市とは？と聞かれ、町の姿を想像してみると、高層ビルが建ち並び、道路や緑地が整備された街を想像すると思います。かつて、「人口300万人の現代都市」を唱えたル、コルビジェの都市計画も、高層ビルや、整備された道路等がみられ、その影響もあり、高層ビル群が各都市で建設されました。

一方、現代社会で最も住みよい街の一つにアメリカのポートランドがあります。ポートランドは、自転車の活用を促進し、通勤時間徒歩20分圏内の実現、古い建築物の解体を抑制し、新旧建物の混在と、住居、店舗、工場など複数の用途を混在したミクストユースや、ローカルファーストの根付きで、地産地消、有機栽培が盛んになったことが住みたい町の要因とされています。そのような思想は1960年代に活躍した、ジェインジェイコブズに代表されるモダニズムへの反省の影響とされていると考えられます。

○ジェインジェイコブズの四原則

経済学者、宇沢弘文の「社会的共通資本」において、都市のあるべき姿はこう伝えられています。「都市とは、ある限定された地域に数多くの人々が居住して、お互いに密接な関係を保ちつつ、政治的、経済的、文化的な活動を営む場である」

宇沢 弘文著
「社会的共通資本」

このように、都市にはある程度の密接が必要とされる中、宇沢弘文はさらに、都市開発に必要とされる手がかりとして引用するのが、ジェインジェイコブズの主張でありました。その中から都市の再生基準として、以下の4つを挙げました。

1、(ウォーカブル)：街路の幅は可能な限り狭く自然的に形成された街路が望ましい。

2、(古い建物)：再開発にさいして古い建築物をできるだけ多く残るよう配慮する。

3、(ミクストユース)：都市の各地域は必ず二つ以上の機能を持つようにする。

4、(密集)：人口密度は十分に高くなっているよう計画されなくてはならない。

○平安京から、京都の町つくり

日本の町の特徴としては、京都と城下町があります。まず京都の基盤である平安京の特性は、碁盤目状に配置された道の中心に幅86mの朱雀大路を軸に大路24m小路12mの街路が広がっており、それを基に、条、坊、保、町の順に町が区画され、町は1辺120mとなります。商業施設としては、左京、右京の2つに限定され、それらはすべて塀で覆われているのが古代京都の特徴になります。中世になると、塀で閉ざされた街も、徐々に崩れはじめ人々の繋がりが表に見られるようになりました。15世紀の応仁の乱の後には、大きく変化し、上京と下京の2つの都市に分かれ、塀で閉ざされた町も、道を介した地域共同体へと変容し、さらに17世紀には、豊臣秀吉の天正の地割によって、町屋の建設は容易となり、そこから成熟した町が、今の京都の姿となりました。

向口 武志 氏

○近世城下町の形成

城下町が成熟する以前の町は、博多や堺などの港や寺院を中心に町ができ、また城主がいる城下にも町は形成されるものの、多くの場合、中世の定期市である六斎市が常態化した町場が各地に形成されていき、城下にある町とは別に大きな町が出来上がります。そして、近世城下町は、都市計画を基に中世から発達した町場と城下にある街を統合し、再編されたとされています。その近世城下町を基に、明治から戦前にかけて、成熟された都市が今の日本の町となります。近世の城下町は、都市計画等を基に再編され、さらにそこから、成熟したことで次第にジェインジェイコブズの四原則を満たすことになっていきます。

近年、DIYやリノベーションが注目されているが、そのような流れは、町つくりの再生に沿っていると思いました。これから町を再生するためには、ポートランドのように建築やデザインに制限をかけていくのも一つだと感じました。

伊藤 大智（JIA三重）
日新設計